

## 宮座の研究(二)

星 真理子

### 一

肥後和男氏は昭和十年に滋賀県庁を介して、県下の村社以上の神社一〇三六社(旧市町村別では一市一二郡一〇三町村)を対象として祭祀組織の調査を試み、その八割(八四四社)の回答を得ている。調査方法は、調査票を配布・記入させる方法と若干の地域の現地調査であった。記入者は各神社の神職・氏子総代・区長・村長その他の神社関係者である。

氏はこれらを土台に、論文「近江に於ける宮座の研究」<sup>(1)</sup>を著わし、宮座の基本的問題を掲げ、具体的な資料及びその考察を多く含む先駆的研究である。後にも同様の方法で調査地を拡大(奈良・京都・大阪・福井・和歌山)し、膨大な資料を整理・分析し、『宮座の研究』<sup>(2)</sup>を著わしている。すなわち後書がより抽象的・理論的であるのに対し、前書が具体的・個別的である。

氏の研究以後四十三年経た今日、近江に存在するとされた宮座はどう変化しているのだろうか。またそれはいかなる変化要因によるのか。

この四十三年間に我国は戦争を始め幾多の社会変動を経験してきた。同様に村落社会も変動を繰り返してきている。殊に最近の変動は著しい。宮座も当然形態的・質的な変化・変容が認められると予想される。本稿は以上の二点を明らかにするための第一段階として、今日滋賀県、特に中部広域市町村圏に存在する宮座の状況を把握することを目的とする。中部広域市町村(近江八幡市・八日市市・蒲生郡安土町・蒲生町・日野町・竜王町・神崎郡永源寺・五個荘町・能登川町)を対象とした中で、蒲生郡蒲生町については無回答であったため、湖南の山間部に位置している甲賀郡信楽町をその対象に加えた。

現在では氏のような（上からの）調査は不可能であるため、滋賀県神社関係者名簿<sup>③</sup>を入手し、各神社（本務社）宛に調査票を郵送し、記入後返送して頂く方法を採用した。調査票の項目は以下である。

本務社に関する設問は、神社名・祭神・由来と創立年代・社格・第二次大戦前に受け持っていた大字と現在の大字であり、兼務社に関する設問は、兼務社の神社名・所在地・兼務社数、兼務社を大字全体を氏子とするもの、小字のみを氏子とするもの、崇敬社であるものの三つに分け、それぞれ印を付けた上で各神社の氏子総代の住所・氏名を記入するといったものである。

本務社宛の調査票の配布状況は表1に示すように、総発送数五一（本務社全部）の内三三社回答（六七・七％）、その内神職が兼務社を持つ者が二五名（七五・八％）、それを持たぬ者が八名（二四％）であった。また兼務社が他町にある者は六名で兼務社を持つ者の四分の一（近江八幡二名、安土・竜王・五箇荘・信楽は各一名ずつ）であった。

神職より得られた調査票をもとに、宮座の分布があると考えられている地域（肥後氏）と、神職の本務社・兼務社の内で大字全体を氏子としている神社を対象に、氏子総代宛に調査票

表1 神職宛の調査票配布状況及び兼務社数

	調 査 票 配 布	回 収	兼 務 社		兼 務 社 合 計*	現存する 神 社 数**
			あ る	な し		
近江八幡	10 (社)	6 (社)	6	1	46 (社)	66
八 日 市	11	6	3	3	28	56
守 土	6	5	2	3	5	13
竜 王	2	2	2	—	34	23
蒲 生	3	0	—	—	—	35
日 野	3	3	3	—	52	52
永 源 寺	2	1	1	—	6	21
五 箇 荘	5	5	4	1	23	24
能 登 川	7	3	2	1	12	29
信 楽	2	2	2	0	14	14
計	51 (社) (100%)	33 (社) (64.7%)	25 (人)	8 (人)	220 (社) (66.0%)	333 (社) (100%)

\* 兼務社合計……兼務社があると答えた人の兼務社の合計

\*\*現在する神社数……『滋賀県神社関係者名簿』より作成

を配布し、記入・回答の後返送を依頼した。従つてこの二つの調査はほぼ同時に行つた。また記入漏れ・不明点については、後日再び葉書き等によりそれを補つた。

以上のような方法であつたため、一部の調査拒否を除いて比較的スムーズに行なうことができた。調査期間は、昭和五年八月下旬より同五年九月下旬までである。

氏の宮座一覧表<sup>(4)</sup>には、旧市町村別に二九四神社が掲げられている。これらは後に何回かの町村合併を繰り返している。

現行の市町村別に割り当てれば七市一二郡三八町村、計二九四神社の一覧でほぼ滋賀県全域に及んでいる。現在滋賀県下には神社が一四三七社ある。その内中部広域市町村圏及び信楽町に存する神社は、全体の二三・二%（三三三神社）である。因に滋賀県下にある神社数の変遷<sup>(5)</sup>は以下のようである。

すなわち明治三十九年、県下には二八七二社あつたが、神社の廃・統合により昭和十三年には一九一社となり、九六一社、三四%の減少である。同様に近畿二府五県では、その減少率の高い府県順に、三重県（八九%減）・和歌山県（八七%減）・大阪府（六五%減）・兵庫県（三五%減）・滋賀県（三四%減）・奈良県（二〇%減）・京都府（八%減）である。なお全国平均の減少率は、四二%であり、その大は三重県・和歌山県で、その小は青森県（五%）・京都府である。

また現在の滋賀県下にある神社の数と昭和十三年のそれと

を比較すると、四七四社、三三%の減少である。このことは宮座を考へる上で重要である。つまり神社の廃・統合により宮座が変化・変容したと予想されるからである。村落社会の生活組織において氏神は村の統合の表象として程度の差は認められるにせよ何らかの意味を持つてゐる。神社の廃・統合の問題は、政府あるいは外部社会からの強力な刺激が村落社会（その内部に変動の要因となる何かを潜在化させているにしても）全体を揺るがし、村の社会構造に應じて構成されている祭祀組織に与える影響の程度のあるにせよ変化をもたらし重要な要因である。従つて滋賀県下、とりわけ中部広域市町村圏・信楽町における神社整理が数字の上だけでなく、個々の村落でいかなる過程を経てどのようになされたのかという点を次の現地調査で試みなければならない。

### 三

さて、当該地域の神社総数は氏の一覧によると八〇社ある。その内三八社から回答を得ることができた。残り四八社については、氏の二冊の著書で触れられている神社と、神職の調査票より大字全体を氏子としている神社を選択して発送したものである。

表2より、総発送数一四八の内八六（内無回答三）、五八・一%（無回答を除くと五六・一%）の回収である。これを更に氏の一覧の神社と神職の回答結果より配布した神社別にみ

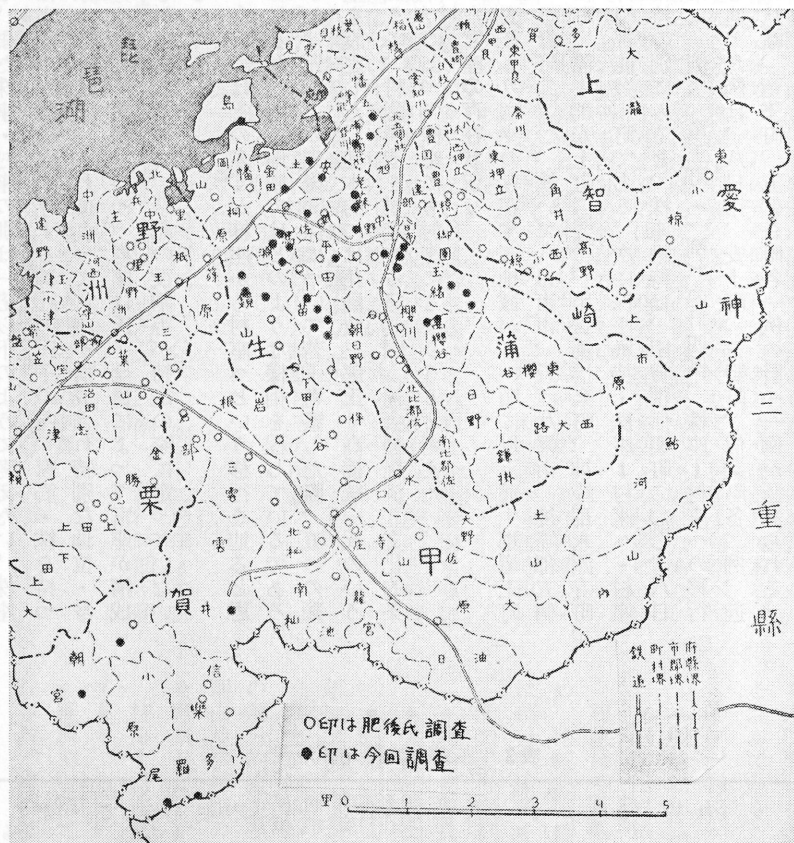
表2 氏子総代宛調査票配布・回収状況

市 町 名	A		B		A + B	A + B	回 収 率 (%)
	肥後氏一覽表 表記神社	回収数	神 職 回 答 結果配布	回収数	総配布数	回 収 総合計	
近 江 八 幡	16	7	7	6 (N.A. 3)	23	13 (N.A. 3)	56.5 (N.A. 除外 43.5)
八 日 市	12	8	8	7	20	15	75.0
安 土	5	5	2	2	7	7	100.0
蒲 生	9	0	0	0	9	0	0
日 野	3	2	15	13	18	15	83.3
竜 王	12	8	10	5	22	13	59.1
五 個 荘	5	3	10	6	15	9	60.0
能 登 川	3	0	2	2	5	2	40.0
永 源 寺	5	0	6	5	11	5	45.5
信 楽	10	5	8	2	18	7	38.9
合 計	80 (100%)	38 (47.5%)	68 (100%)	48 (70.6%)	148	86	58.1 (N.A. 除外 56.1)

ると、前者は三八神社(四七・五%)、後者は四八神社(七〇・六%)の回収であった。この場合、各市町村別の配布数と回収率に片寄り(例えば蒲生町は神職より氏子総代を紹介して頂くことができず、今回はやむをえずこれを除外した。また能登川町・永源寺町についても肥後氏の調査当時と現在の比較ができない)があるが、中部広域市町村圏に現存する宮座については、大まかな把握ができる。

氏の調査以後今日までの当該地域の市郡町村についてみれば、郡名は同じであるが、市町村の境界は相当変化してきている。このことは、昭和二八年市町村合併促進法によるもので、小規模町村(人口八千人未満)を合併し、昭和三一年には六市(大津・彦根・長浜・近江八幡・八日市・草津)・四一町・一〇村の計五七市町村となり、更に同年新市町村建設促進法により未合併町の解消ははかられ、六市四〇町七村の計五三市町村となった。その後二―三の合併・市制等が行なわれ、昭和四六年前後には、村は朽木村(高島郡)を除いて全て町となり、現在では七市四二町一村、計五〇市町村となっている。ここで合併によって境界がどう変化したかをいちいち示せば良いのだが、添付した氏の分布図の旧名からおおよその見当がつくため割愛する。また地図中の○印は氏の宮座一覽にあるもので、●印は、今回回答を得たものの内の三八例である。この図から氏の調査以後もお宮座が維持

図1 宮座の分布



されていることは明白である。この維持・存続している宮座及び今回得られた他の存続している宮座について具体的に次で考察する。

#### 四

この調査では、宮座の組織・行事・経営・宮座に対する住民の意識等に関する設問を二二項目設けた。これら全てについて詳細に報告すべきであるが、紙巾の関係上その一部に止まることを了承願いたい。従って本稿では、宮座の変化を中心としてとりわけ戦後の民主化および高度経済成長下における宮座がどのように変化・変容し、更にそれがどう導かれてきたかという点に重点を置き考察することとする。

宮座の定義については拙稿で若干考察した。ここでいう宮座の意味を一応規定すれば次のようである。宮座とは、当該の村落社会の中にある氏神の祭祀その他の運営に関して特別の役割をもつ人びとから構成され、人びとの意識や村落の社会構造に対してさまざまな影響を及ぼす祭祀組織であ

る。また株座・村座の別は一応以下のように考えたい。株座は当該の村落社会に存する神社の氏子の内、家筋・株を持つ家々が一定で、これによって宮座が構成され特別な地位・身分や権利・義務を持つ。村座は氏子全員によって宮座が構成されているもので、祭祀の役割等が特定の家に定っていないものである。

今日ではその多くが株座から村座へという移行を辿ると思われるが、当該地域ではどのような様相を程しているであらうか。先にこの先後関係について若干考察した際、五つの類型を設定した。基本的には花島政三郎氏や高橋統一氏のいうように、村落構造を規定する諸要因（社会経済||文化的条件）によって株座にも村座にもなりうると考えたい。

### △宮座の存在状況▽

表3より宮座の存在する地域が多い順に以下蒲生郡竜王町・日野町(同数)、続いて八日市市、近江八幡市、神崎郡五個荘町、蒲生郡安土町(同数)、甲賀郡信楽町、神崎郡永源寺町、神崎郡能登川町である。次に株座維持・株座↓村座へ・村座維持の別にみると、株座維持は、甲賀郡信楽町(二例)、八日市(一例)、竜王町(一例)の計四例、株座↓村座への移行を辿った例は、八日市、安土町、日野町、信楽町各二例、近江八幡、竜王町、五個荘町各一例の計一一例が認められる。村座維持(元形不明で現在村座の一例を含む)は、日野町、

表3 宮座の存在状況

	株座	株座 消滅	株座 ↓ 村座	元村	来座	元形不明 現在村座	村座 消滅	不明	宮座が 存在しない	計 (%)
近江八幡		1	1	7					1	10 (12.0)*
八日市			2	6		2			4	15 (18.0)
安土	1		2	3				1	1	7 (8.4)
竜王	1		1	11						13 (15.7)
日野			2	11					2	15 (18.0)
永源寺				4			1			5 (6.0)
五個荘		2	1	5					1	9 (10.8)
能登川				2						2 (2.4)
信楽	2		2			1	1		1	7 (8.4)
計	4 (4.8)	3 (3.6)	11 (13.2)	49 (59.0)	3 (3.6)	52 (62.7)	2 (2.4)	1 (1.2)	10 (12.0)	83 (100)
村座				63 (75.9)		* 無回答3は除外				

竜王町、八日市、近江八幡、五個荘町、永源寺町、安土町、信楽町、能登川町の順に計五二例認められ、村座の存在が八割近くあり、その元の形が村座であるものばかりである。このことは株座↓村座へという移行でなく、村座↓村座へである。この移行に関しては次の現地調査を待たねばならないが先後関係を考えるには村の開発・発展を個々の村落について詳しい調査を行なわねばならない。

消滅した宮座は、株座例が五個荘町（二例）、近江八幡（二例）。村座例が信楽町（一例）の三例、村座例が永源寺町、信楽町の二例である。

株座・村座ともそれが内的あるいは外的に変化変容するには、変動が引起された時期及び理由が存在する。次にその理由について例を掲げて考察したい。

#### △移行及び消滅の時期と理由▽

①㊦、株座から村座へ移行した時期とその例数。

●明治初期～中期（二例）

●大正（一〇年）（一例）

●昭和

（八例）、一六年（一例）、二〇年～二五

年（四例）、四〇年（一例）、五〇年（一例）、移行時期不明

（二例）

㊦、株座が消滅に至った時期とその例数。

●江戸末期（二例）、消滅時期不明（一例）

なお、移行数に若干の誤差があるのは、同一の宮座でそれの内的変化をより一層著しくさせたと思われる二―三の事項を含んでいるためである。

②㊦、村座が消滅に至った時期とその例数。

●明治初年（一例）

●昭和四五年（一例）

村座はそれ自体フラットな家関係の上に成り立っているため、比較的維持しやすい性格をもつ。しかしながらその内容は部分的変更を行なってきた。

③㊦、村座がその内容を変更した時期とその例数。

●明治初年（一例）

●大正初期（二例）

●昭和（七例）一〇年（一例）、二〇年（二例）、四五

年（二例）、五〇年（二例）

以上が何らかの理由によって移行及び消滅、あるいは内容の部分的変更がなされた時期である。ここで株座の村座化の理由及び村座の内容の変更を通じて各々の変化・変更の理由を考察しよう。

株座↓村座に至ったその理由については以下のことが記してある。

。経済力を得てきた者（座外にあった）により、座の改革がなされ、座の拡大、拡張がはかられ、氏子全員に開放される

に至る（三例）近江八幡西庄町饒石神社、竜王町小口真氣神社、五個莊町結神社。

。神社合祀により、祭祀権の平等化（一例）。日野町追神社。

。戦後の民主主義により座を開放（二例）。八日市蛇溝町長緒神社、安土町内野八幡神社。

。地子（その土地に生まれた者）と養子の別なく神事を勤めるよう改正。（一例）竜王町小口真氣神社。

。理由不明（四例）

村も長い間にはそれぞれ変化する。従って村の家々も繁栄と衰退を免れ得ないし、新しい入村者も生じる。近江商人発祥の地である近江八幡・日野・五個莊を中心に宮座の内部においても権力の交代があったと思われる。この例を次に引く。

竜王町小口真氣神社では氏人（郷土・代官・庄屋）七・八軒が株を持ち、祭祀を独占していたが、明治維新にその支配力を失ない、逆に村人（小農・小作・商人）の内の数人が近江商人となり、経済力を得てきたため、明治中期より神社の経済・経営・祭祀を村の全戸に開放している。この時全戸にとって不都合と思われる文書の焼却や、株を持つ特定の家々が神社に寄進した石組みをけずり取る等が行なわれた。

また五個莊川並結神社では、財閥系の家一〇軒が村の財政の大部分を負担し、祭祀も独占していたが、昭和一六年前にそれらの家の衰退に伴い村の全戸に解放している。

村座の内容を一部変更した事柄とその理由については以下である。

。神事のやり方・座席の位置の紛争により、当番制へ変更。

八日市三所神社（明治初年）。

。神社合祀により祭祀圏の拡大。竜王町西川吉水神社（明治四一―四二年）。

。戦後の民主化により頭屋を年長順に改正。近江八幡長福寺町八幡十二神社。

。戦後、中老・若衆を廃止し、前髪のみ残す。五個莊町宮莊五箇神社。

。分家・養子の神事参加資格を地子と同等にする。近江八幡岩倉町馬見岡神社・諏訪神社、八日市巽神社。

。農地開放・社守死亡により（希望者もなし）選出方法を改正。八日市上大森町八坂神社、日野町芦谷神社。

。大人入り（鈴入りという）が長男出生順であったのを年長順に改正。竜王町西川吉水神社（昭和五〇年）。

。頭屋を勤める者がいないため、年長順に半年交代に勤めるよう改正。安土町西老蘇若宮神社（昭和五年）。また時代の流れに従って、神事家（頭屋）・乙名を廃止し、年長順に

二ヶ月交代で神社に住み込み可能な者と改正。安土町東老蘇奥石神社（昭和四〇年）。

。兼業農家増大のため祭日の変更、これは大部分の神社で行



なわれている。

ダム建設により村が水没し、氏子が三地域に分散したため宮座を廃止。永源寺町佐目若宮大幡神社（昭和四五年）。

以上が主要と思われる例である。（株座 三例、村座 一例の消滅理由は不明）これより宮座の変化する直接的・間接的な要因は、大まかに、①明治維新、②神社整理、③第一次・第二次世界大戦の諸政策（農地改革、民主化）、④高度経済成長下の農村の都市化・産業化等以上四点である。ではこれらの要因がどのように宮座の変化と結びつき、変化が導かれたのであろうか。

①明治維新の宮座にもたらした影響は、氏の指摘もあるように「一君万民平等という方向に国民を導いたこの大変は、特権的存在たるを以てその本質とした宮座に対して根本的変革を与えずに置かなかった。神社はこの時急激に氏神的性質を失い、産土神としての性格を顕著にして来た」ここにおいてはおもはや祭祀の独占がされ得なくなり、株座が次々に村座へ移行、あるいは一挙に消滅に至ったのである。

②（二）において神社の廃・統合の問題について触れたが）以上のような宮座の質的・形態的变化は、明治四十一年に全国的に実施された神社合祀により更に促進され、氏が平等に祭祀を行なう（村座）ようになる。

③ 日本が第二次世界大戦に敗れ、アメリカ軍政支配の下

で、民主主義の強制と伝統的なものの廃棄の政策が押し進められる中で、宮座の衰退はより一層顕著となっている。また農地改革で、神社の財産としていた田を没収されたため、神社経営が困難となっている。

④高度成長下の農村の都市化・産業化は、主として生活圏の拡大、通勤農家の増大、部落意識の希薄化、部落的強制的弱体化、団地の進出による混住化の現象をもたらす祭祀圏の拡大（外来者の祭祀参加の問題）等をもたらした。滋賀県の都市化・産業化の波は、昭和三四年の名神高速道路建設開始及び栗東インターチェンジを中心とする地域への京阪神から

表4-1 滋賀県全体の産業別就業人口

産業別	昭和30年		昭和50年	
	就業人口(人)	(%)	就業人口(人)	(%)
第一次	211,331	51.4	87,787	18.0
第二次	84,486	48.6	189,144	82.0
第三次	115,434		210,549	
計	411,251	100	487,480	100

資料；各年次の国勢調査による。

表4-2 総農家に対する専業農家〔滋賀県全体〕

	昭和35年		昭和50年	
	(人)	(%)	(人)	(%)
専業農家	30,223	31.0	3,475	3.4
総農家	97,548	100	82,922	100

資料；各年次の国勢調査による。

の工場進出に伴い、湖南・湖東を中心とした工業化が急速に進行した。結果、第一次産業は衰退し、第二次・第三次産業の発展をもたらしたのである。(表4-1・2参照)

表4-1より、昭和三〇年と五〇年を比較すると、第二次

・三次産業は、昭和三〇年には全産業の五割足らずから昭和五〇年には八一・八%と二〇年間に三〇%も増加している。

これとは逆に第一次産業は、昭和三〇年に五一%強であったのが二〇年後には一八%、三三・六%の減少で第二次・第三次産業の増加率を上廻っている。また表4-2より昭和三五年には総農家の三〇%が専業農家であったが昭和五〇年には三・四%に激減しており、第一次産業と第二次・第三次産業へ転換するに至ったのである。<sup>(11)</sup>

四十三年前の氏の調査と比較して現存する宮座はその変化の多くが③・④に関するものであり、殊に③による変化は内的変化を顕著にしている。

## 五

宮座にはしばしばモロト・ムロト<sup>(12)</sup>(室人・室徒)と呼ばれ、村の草分けとか旧家とか称するものがあり、宮座に出席する株を持つ。従ってこの株を持たない者は、宮座に出席できない者である。宮座は、座人あるいは座衆が一体となって神主と頭屋とがその中心として祭を営むのを特徴としている。座人には年令階級がある。これは宮座のみが持つ特徴ではな

いが、宮座の存するところではこれを多く伴っている。今回宮座の存在が認められるもの三四例の内年令階級を伴うものが一六例(四七%)あり、宮座と年令階級との関係が密接で、宮座組織の規律の一つと思われる。

宮座はある意味で戸籍役場の役割を果たしている。ここに例をとるのは竜王町鏡神社・近江八幡上畑町天神社・八日市三津屋神明神社である。

竜王町鏡神社の氏は一一五戸全戸で宮座を構成している。氏子長男出生および養子婚姻と同時に宮付料(一万円)を納め、『鏡神社祭祀宮付帳』へ登録する。その後三〇才位で頭屋を勤め、その順に長老入りし、長老一〇人にはいる。これを神社に関する全ての問題を協議決定する評定委員と言う。

近江八幡天神社の氏子二〇戸は、出生した時に子振舞いと称し長老<sup>オナナ</sup>一二人を招待して宴を持つ。これを長老が『長老中記録』に登録する。登録された者は村人<sup>ムラジン</sup>と言いいこの順に年行事(宮守)を一年勤め、宮の守・神事の一切の世話をする。

八日市神明神社の氏子五六戸は、男子一五才で宮座入り(鳥帽子<sup>チゴザン</sup>という)をなし、鳥帽子講(若衆)を一五才・二五才まで勤め、後に神事受け(六〇才位)をする。その順に神守(頭屋<sup>(13)</sup>六五才位)を一年勤め、神守を終えた者の高令者四名を横座といい、祭典には高席を占める。役割は祭典・惣会に出席し、鳥帽子入りの儀式の主役を果たす。なお横座は終身

表5 養子・外来者が頭屋になる条件

養子に対する条件	条件つき でできる (%)	条件なし にできる (%)	できない (%)	N. A. (%)	計 (%)
株 座→村 座	5 ( 7.4 )	2 ( 2.9 )	0 ( 0 )	4 ( 5.9 )	11 (16.2)
村 座 維持	18 (26.5)	22 (32.4)	2 ( 2.9 )	11 (16.2)	53 (77.9)
株 座 維持	1 ( 1.5 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	3 ( 4.4 )	4 ( 5.9 )
計	24 (35.6)	24 (35.6)	2 ( 2.9 )	18 (26.5)	68 (100)
外来者に対する 条件	条件つきで できる	条件なしに できる	できない	N. A.	計 (%)
株 座→村 座	9 (13.2)	1 ( 1.5 )	1 ( 1.5 )	0 ( 0 )	11 (16.2)
村 座 維持	29 (42.6)	10 (14.7)	5 ( 7.4 )	9 (13.2)	53 (77.9)
株 座 維持	1 ( 1.5 )	0 ( 0 )	3 ( 4.4 )	0 ( 0 )	4 ( 5.9 )
計	39 (57.4)	11 (16.2)	9 (13.2)	9 (13.2)	68 (100)

である。また他部落からの養子の場合、年令にかかわらず鳥帽子を一年以上勤めねば神事受けの資格がない。つまり鳥帽子が氏子入り（「宮座入り」）である。この鳥帽子講（若衆）の主たる役割は、祭典に踊りの奉納・神輿の渡御（駕輿丁）をする。宮座において若衆は次の世代を担う者として必

ず通過せねばならないとされている。またこの頭屋にあつた者（頭人）は、村人全体を代表して村の生活や生産に幸福がもたらされるよう祈願し、招福除禍に全精神を凝集して神を守るのをその役割としている。

頭屋の勤め（宮座行事は、主に元旦祭・春秋の祭である）を日野町白髪神社（シラヒゲ）に例をとると以下である。

●頭屋の床の間には御神体を受け仮宮殿を作っている故、毎朝玉水・洗米・塩を取りかえ札拝奉仕をすること。

●月次祭（毎月二〇日）の前日に三名の社守は宮の境内を大掃除すること。

●月次祭には午前五時に社守三名は宮殿に上殿し、献撰物を供えて参拝者を待つ。午後二時に官司が来る。

●四月二〇日の大祭（泥鰯（ドジョウ）祭り）に社守の家で準備に取りかかる。その内容は一六日に米飯、一七日買物、一八日餅搗き、榊切り、一九日泥鰯取りである。

では養子や村外からの来住者が頭屋になることができるだろうか。できる場合、その条件があるか否かについてみると以下である。表5より、養子の場合、条件付きと、条件なしが同数であるのに対し、村外者が頭屋を勤める場合にはその六割近くに条件が付けられている。また条件なしに頭屋ができる場合をみると、移行した例が一例と、村座維持のものが一〇例で、その多くは元からではなく、改正を行なっている。

表6 頭屋の禁忌

	禁忌ある (%)	禁忌ない (%)	N. A. (%)	計 (%)
株座 → 村座	7 (10.3)	3 ( 4.4)	1 ( 1.5)	11 (16.2)
村座 維持	27 (39.7)	13 (19.1)	13 (19.1)	53 (77.9)
株座 維持	3 ( 4.4)	0 ( 0 )	1 ( 1.5)	4 ( 5.9)
計	37 (54.4)	16 (23.5)	15 (22.0)	68 (100)

また養子の場合にも改正によるものがそのほとんどである。ただこの場合、その家の座へはい(15)るという点、条件の緩和がみられる。また村外者を頭屋とすることがどうかについて、多くの地域で話し合いが持たれており、八日市河桁御河辺神社は、団地住民は全く排除の状態を維持(この例は多数)し、竜王町真気神社では惣会で五―六年後より頭屋を(団地へ)廻すと決定している。ここに宮座のもつ内に開放的で外に排他的という構造原理が今後次第に緩和される方向を見出し得るが、また逆に氏子入りの制限をより厳しくする方向に向うもの(八日市下羽田町鉦神社)もある。これらについてもより詳しい現地調査を必要とする。

また頭屋は定められた禁忌を

守らねばならない。表6より無回答が二二%あるにしても、禁忌があると答えている者が全体の五四%強で、非常に強いと言える。禁忌は村落の社会秩序規制として機能している。村座が全体の八割弱ある中でその六割強に禁忌がある。また村座化したものの内七割近くに禁忌がある。株座ではその秩序規制が厳格であるのはよく見られるが、村座においてもこのように固く守られている。ここに日野町原の芦谷神社の禁忌をみてみよう。このような例は調査対象地には多々見られる。

- 神主は下肥を荷ってはいけない。
- 相棒(二人で物を荷う)をしてはならない。
- 葬式には家族及び兄弟共参加してはならない。
- 外泊はしてはならない。(最近緩和されてきている。)
- 神主の期間中に妻が死亡した場合は辞退せねばならない等、相当に厳格である。このような禁忌の厳しい地域(日野・竜王・八日市・信楽)ではそのほとんどが不文律である。

頭屋はこの他同一村落内に居住する親戚からの手伝いや家族の手伝いを必要とし、神事が親族一同の結束の強化をはかる機能を果している。このことは、村の生活の深いところを絶えず流れているように思われる。

## 六

さて、頭屋を勤め終えると、氏子としての付き合いが認められ、共有林の手入れ作業・神社に関する奉仕等で一人前とし

て扱われ、大字の給料は本給となる。この段階で「おとな」<sup>(16)</sup>になる資格を得る。「おとな」は村の長老として主に神社・祭祀にかかわる全ての議決機関として機能し、宮座全体に支配権を持つ。また同時に氏子の指導・神社の守護・全ての祭典及び惣会へ出席する義務がある。

おとな・年寄と称するものが年長順に一番序・一和尚・一番ジョウ・二番ジョウといわれる地域がある。(順に八日市大森町大森神社、同大森町八坂神社、安土町日吉神社。)これはおとなの内、最年長者またはそれに次ぐ者である。おとなには二人・四人・五人・六人・一〇人・一二人・一八人・二四人等が記されており、これを一〇人衆とか老衆等と呼び座によってさまざまである。これを構成する人数の多いものは、一〇人(一三神社にある)、一二人(五神社にある)である。おとなの機能の例として日野町白髪神社と竜王町鏡神社をみてみよう。

白髪神社では長老順に長男<sup>オトナ</sup>講入りするが、寺世話や氏子総代・社守を勤めない者や世帯を持たない者は除外している。氏子総代は、神社内の施設の変更や修理、境内の立木の枝打ち等のある場合、勝手にこれを行なってはならず、長男<sup>オトナ</sup>(一人)の了解を求めねばならない。

竜王町鏡神社の長老(評定員、一〇人)は神社にかかわる事は全て決定する。近年、頭屋辞退者の増加が問題となっ

表 7 頭屋に対する態度

	非常に強い (%)	強い (%)	ゆるめたい 方がよい (%)	N. A. (%)	計 (%)
株 座→村 座	1 ( 1.5)	3 ( 4.4)	3 ( 4.4)	4 ( 5.9)	11 (16.2)
村 座 維 持	2 ( 2.9)	18 (26.5)	12 (17.6)	21 (30.9)	53 (77.9)
株 座 維 持	1 ( 2.9)	3 ( 4.4)	0 ( 0 )	4 ( 5.9)	4 ( 5.9)
計	4 ( 5.9)	24 (35.9)	15 (22.0)	25 (36.8)	68 (100)

ている。つまりこれ迄は経済的理由や養子を理由としていたが、近年は理由なしの辞退である。これらに關しても評定委員会が全て決定する。

## 七

村人の頭屋制に対する態度はどうであろうか。これに対する設問は、「頭屋の制度をいつまでも守り続けたいという気持ちがあるあなたの部落では強いですか、弱いですか」である。表 7 によると、無回答が四割弱あるが、いつまでも守り続けたいと答えた者が四一・八%で、その理由は「神事ごとだから」「一度崩せばもうもとに戻らないし、神社の誇りだから」「心のよりどころ」が圧倒的で人々の意識の特質や頭屋制がこの地域で果している機能の重要性を見出すことができよう。また

「ゆるめた方がよい」と答えた二割程度の者は、「経済的負担がかかりすぎる」「行事が固苦しい」点を理由としている。

一方氏神に対する意識については、「強まってきている。

生活のよりどころであり、部落の団結を強めるために必要である」等が多くみられる。具体的には、神社の改修工事等に予想以上の寄附が集まるとか、氏子全員が無事なのは氏神様のおかげであるから、祭は盛大にやらねばならない。とか頭屋を勤めた後氏神様の使者として村人から敬われる。とか、旧来のものはどんな事があっても守らねばならない。また毎日朝夕の神社参拝者は多数である等々で、弱まっている理由として、生活の収入を農業外に求めるようになったためとしている。しかしながら、頭屋制や禁忌に対する意識、氏神様に対する意識等をみる限り、弱まりこそすれ、消え去るものではなく、潜在化したり、顕在化する中で存続するものと考えられる。

村落社会を變動させる要因は、その内的なもの、外的ものの、そして過去から現在へ、また未来へという大きな流れにある。つまりある時点においては支配的であり、その社会の特徴であつたものが次の時点では衰退してしまい、それに代わつて別の要因が支配的となり、その社会の特徴となるものである。これらの内どれが先行要因となるかは断定できないが、多くの場合外部社会からの影響であらう。外的な刺激は、

急激に村落の構造全体に影響を及ぼす。宮座の變動を考える場合、そういった要因がどのように宮座の構造に結びつき、またどのような経過を経てそれを変動に導いてゆくかという問題が重要である。つまり表面的に変化しているように見えても、その内部の核となるような部分は変化していない、または変化しにくい部分が存在していると思われる。例えば祭儀のやり方や年令階級の一部の變更・廃止を行なつても、氏神を村人の精神的支柱として守り続け、先祖から受け継いだその精神を未来へと引き継ぐといった部分は変化しないであらう。

現在の村落社会は、かつてのようにそれ自体が全体社会であるような小宇宙的存在を保ち得ない。従つて村落の生活・生産を變化させる最も強力な要因となる刺激は、外部社会からのそれである。つまり資本主義の發展やそのもたらす都市化・産業化である。宮座は宗教的なものが優位にある社会（伝統的社会）にあつては、株座的な宮座が多く存在し、経済的なものが優位にある社会（近代的社会）にあつては村座的なものが多く存在する。ただし株座・村座が存続する場合、その過程で若干の内的・外的變更は免れえまい。

以上、不充分ながら中部広域市町村圏・信楽町に存する宮座を大きく把握し、今後の調査で明白にすべき点の指摘を行なつた。その主要なものについて列挙すると以下である。

一、村座（元来）のもつ問題。一般に株座から村座へという移行と考えられているが、湖東では村座↓村座が大部分であった点。

二、株座の存在はわずかであるが、山間部に現在もなお維持されてきている。

三、若衆・中老・長老の完全に整った年令階梯制はみられず、若衆と長老が認められた。その役割機能は、上昇するに従い重くなるものであった。株座には存在していない。

四、頭屋制はどの地域にも認められ、宮座にとって頭屋が重要で、氏神との関係は村落社会の結合を一層強固にし、氏神が村の統合の象徴的機能を果している。

五、神社合祀が滋賀県下で具体的にどのような過程でなされ、どう神社が合祀され、村人の意識はどう変ってきたのか。具体的に現地調査を試みる中で明らかにせねばならない。

六、都市化・産業化の中での宮座の変化を特に村落構造との関連でみてゆかねばならない。

最後に、今回のアンケートに際して、多くの方々から、再三お手紙・お電話等を頂いた。心より厚くお礼を申し上げたい。

#### 〈註〉

- (1) 肥後和男、『近江に於ける宮座の研究』臨川書店、一九三八。
- (2) 肥後和男、『宮座の研究』弘文堂、一九七〇。
- (3) 滋賀県神社庁、『滋賀県神社関係者名簿』、一九七五。

(4) 肥後前掲書、一九三八、五〇七五頁。第三章宮座の分布。

(5) 萩原龍夫、『中世祭祀組織の研究』吉川弘文館、一九六三、七三四頁。神社・神職分布表。

(6) 米地実、『村落祭祀と国家統制』御茶の水書房、一九七七、三一―一四八頁参照。

森岡清美、『明治末期における集落神社の整理（一）―その全国的経緯―』『社会科学論集』第十六号所収、東京教育大学文学部、一九六九、参照。

(7) 拙稿、『宮座の研究』（一）『仏大社会学』第三号、仏教大学社会学研究会、一九七八。

(8) 花島政三郎『部落自治の運営と宮座―滋賀県永源寺町佐目部落の事例―』、『日本民俗学』四一、一九六五、一二頁。

「―株座から村座へという不可逆的な史的展開を遂げるものではなく、むしろ両者は、村落構造を規定する諸要因の変化に伴って相互転換しうるものとみるべきである。そうすることによって村落の史的展開に即応したより精緻な宮座論が打ち出される」

(9) 高橋統一、『宮座の構造と変化―祭祀長老制の社会人類学的研究―』四八―二六九頁。および拙稿参照。

(10) 肥後前掲、一九七〇、五八〇―五八二頁。

(11) 詳しくは『社会学研究所紀要』第一号、仏教大学研究所、一九八〇年、第二章参照。

(12) 今回の調査ではかつて存在していたという報告に止まるが、三例認められた。

- 日野町小野、天神社：室人株
- 五個荘町金堂、大城神社：室人株
- 近江八幡市、大嶋・奥津島神社：村生人。
- (13) 調査地内に存在している頭屋の名称は次のようである。

頭屋の名称	数 ( % )
頭屋	11 ( 16.2 )
当家	2 ( 2.9 )
当主	5 ( 7.4 )
お当	1 ( 1.5 )
お主	1 ( 1.5 )
神主	5 ( 7.4 )
神社	1 ( 1.5 )
宮守	21 ( 3.1 )
宮守	9 ( 13.2 )
神守	1 ( 1.5 )
神事	2 ( 2.9 )
神番	1 ( 1.5 )
青年	1 ( 1.5 )
青年	1 ( 1.5 )
年行	1 ( 1.5 )
年行	1 ( 1.5 )
神社	1 ( 1.5 )
客務	1 ( 1.5 )
客世	1 ( 1.5 )
うま	1 ( 1.5 )
花警	1 ( 1.5 )
固	1 ( 1.5 )
計	68 ( 100 )

(14) 白髮神社は、大字蓮花寺（九五戸）と大字野出（五五戸）の氏神で、制度上の神職は長寸神社の宮司が兼務している。氏子総代は、蓮花寺五名、野出三名で任期はない。社守は蓮花寺二名（神事組が大組五〇戸と小組四〇戸とで作られており、いずれも世襲制。主な姓は大組では西河の大部分と提、奥野、高橋、小森等で小組は西河の一部と奥野、柊、岩倉、高橋）で、野出は年令順に夫婦揃った世帯持ちより出る。社守（一年）を勤め終えると年長順に長男講入りする。長男講の人数は、蓮花寺一〇人、野出八人で、いずれも終身である。

(15) 八日市大森町大森神社 一五〇戸の内座株を持つ者約九〇戸は、「九文座・助座・平尾座」の三座を構成し、来住者は全く座にはいない。ただ養子はその家に伝わる株がある故座入りできる。また都会から戻つて来た人の場合親戚の座へはいることはできる。竜王町須恵八幡神社には村座（右座六五戸、左座六三戸）がある。村座入りは五一六才、頭屋は四一五〇才（村座入りの順）で、頭屋を終えた翌年は年行司（祭礼当番残りと言ふ）を勤める。後、村座の年長順に各座五名ずつおとなとなる。養子が頭屋になるのは、村座入りの順で七一八〇才。外来者はそれより後に廻ること

おとな及びおとなに代わるものの分布状況

市町名	おとなが 存在して いる (%)	おとなに 代わるも のの存在 (%)	計 (%)	宮座の ある地域
近江八幡市	6 ( 8.8 )	1 ( 1.5 )	7 (10.3)	8
安土	2 ( 2.9 )	4 ( 5.8 )	6 ( 8.8 )	11
竜王	2 ( 2.9 )	2 ( 2.9 )	4 ( 5.8 )	5
日野	10 (14.7)	0 ( 0 )	10 (14.7)	13
永源寺	2 ( 2.9 )	1 ( 1.5 )	3 ( 4.4 )	13
五個荘	0 ( 0 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	5
能登川	2 ( 2.9 )	2 ( 2.9 )	4 ( 5.8 )	6
信楽	0 ( 0 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	2
計	2 ( 2.9 )	0 ( 0 )	2 ( 2.9 )	5
計	26 (38.2)	10 (14.7)	36 (53.0)	68

(17) 頭屋辞退者のことを「直し」と称し、直し料現在五万円である  
また八日市糖塚町巽神社（氏子三九戸）では頭屋辞退のことを  
「直し」と称し、直し金は現在五〇万円である。ただこの神社の  
氏子は、一代に若屋と神主の両方の当屋をせねばならない。神主  
だけ直しの場合、その七割を、若屋だけの場合、その三割を支払  
う。

将来当屋の義務を果す場合は直し金を返却する。最近直しは減少の傾向にある。若屋は一五才以上結婚する迄の若衆・嘶し方が集合し、神主の家へは駕輿丁が集合する。(本学研究生)

(本学研究生)